

〔榮花物語月宴〕月日も過て康保四年になりぬ、月頃うち上○村にれいならず、なやましげにおぼしめして、略中御心ちいとおもければ、小野宮のおとゞ○藤原之のびて奏し給、もし非常のこともおはしなれば、東宮にはたれをか御けしき給はりたまへば、式部卿の宮○爲をとこそおもひしかど、いまにおきてはえぬ給はじ、五宮○圓をなんぞか思ふとおほせらるれば、うけたまはり給ひぬ、略中つひに五月廿五日にうせ給ひぬ、東宮○冷くらぬにつかせ給、略中春宮の御事、まだともかくもなきに、よの人みな心々に思さだめたるもをかし、おとゞはみなえりておはすめるものと、よろづ御のちの事ともいひみじ、略中すこし心のどかになりても、春宮の御事有べかめる、式部卿宮わたりには、人ぞれすおとゞの御けしきをまぢおぼせど、あへておとなければいかなればにかと御むねつふるべし、源氏のおとゞ○高明もしさもあらずば、あさましうもくちをしうもあべきかなと物思ひにおぼされけり、かゝる程に九月一日東宮たち給、五宮○圓ぞたせ給、略中源氏のおとゞ○略中あさましく思ひのほかなる世中をぞ、心うきものにおぼしめさるゝ程に、年もかへりぬ、略中かゝる程に世中にいとけしからぬ事をぞいひ出たるや、それは源氏の左のおとゞの、式部卿の宮の御事を覺して、みかどをかたぶけ奉らむとおぼしかまふといふ事いできて、よにいとゞにくゝのゝゑる、いでやよにさるけしからぬ事あらじなど、よ人申思ふ程に、佛神の御ゆるしにやげに御心のうちにもあるまじき御心やありけん、三月廿六日安○和二に、この左大臣殿にけびぬし打かてみて、宣命よみのゝしりて、みかどをかたぶけたてまつらむどかまふるつみによりて、大宰權帥になして、ながしつかはすと、いふことをよみのゝしる、略中式部卿の宮の御心ち、おほかたならんにてだにいみじとおぼさるべきに、まいてわが御事によりていできたることゝおぼすにせんかたなくおぼされて、われもくゝといでたちさわがせ給、